

発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

妻沼聖天山の建造物9件が国登録有形文化財に

平成 28 年 11 月 18 日、国の文化審議会は熊谷市の妻沼聖天山に所在する「歎喜院籠堂(かんぎいんこもりどう)、鐘楼(しょうろう)、閼伽井堂(あかいどう)、三宝荒神社(さんぼうこうじんしゃ)、五社大明神(ごしゃだいみょうじん)、天満社(てんまんしゃ)、仁王門(におうもん)、水屋(みずや)、平和の塔(へいわのとう)」9 件を登録有形文化財(建造物)に登録するよう、文部科学大臣に答申しました。国宝「歎喜院聖天堂」や重要文化財「貴惣門」を手掛けた大工や彫刻師が関わった物件があるほか、地域の信仰や風土の歴史を明らかにするものとして評価されたものです。

平成 27 から 28 年度、熊谷市教育委員会は国登録有形文化財への具申に向けて、妻沼聖天山内の建造物について測量・図面化や概要調査を実施しました。各建物の詳細は熊谷市ホームページ及び熊谷デジタルミュージアムをご参照ください。

この登録により、市内の登録有形文化財は 12 件となります。(現在、他に「坂田医院旧診療所」、「熊谷聖パウロ教会」とその「門」の 3 件が登録されています。)(山下)

写真：上 歎喜院平和の塔、下 歎喜院仁王門



妻沼聖天山・国登録有形文化財の位置図

市内遺跡発掘情報

前中西遺跡(まえなかにしいせき)

平成28年9月から10月かけて、上之地内において、個人専用住宅建設予定地の発掘調査を実施しました。調査により、竪穴住居跡と考えられる竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡5棟、溝跡5条、土坑4基、ピット18基、河川跡1か所が確認されました。

このうち、出土遺物により時期が明確に判明した遺構は、溝跡1条、土坑1基とわずかで、いずれも古墳時代後期のものでした。また、河川跡についても、古墳時代後期から奈良・平安時代までの土師器・須恵器等が出土していることから、少なくともこの時期には河川として機能していたことが分かりました。なお、この河川跡は、調査区の南に沿ってある現道(幅約4m)がこれまでの調査成果から旧衣川の河道であったと推定されていることから、今回のものと合わせて考えると、当時の河川幅は広く、少なくとも15mはあったと推定されます。(吉野)

写真：調査区全景(右半分が河川跡、西から)



諏訪木遺跡(すわのきいせき)

市内上之では土地区画整理事業を進めるにあたり、事前に発掘調査を行っています。今回は、平成28年5月から10月まで実施した諏訪木遺跡の調査についてご紹介いたします。

今回の調査では、主に古墳時代前期(約1,600年前)の竪穴住居跡や方形周溝墓、江戸時代(約300年前)の墓や大溝、井戸跡などが見つかりました。古墳時代前期については、集落廃絶後に墓域として土地利用がなされていたことが明らかとなりました。江戸時代の遺構群については、調査箇所隣接する寺院(東光寺)に関連するものと考えられます。(松田)

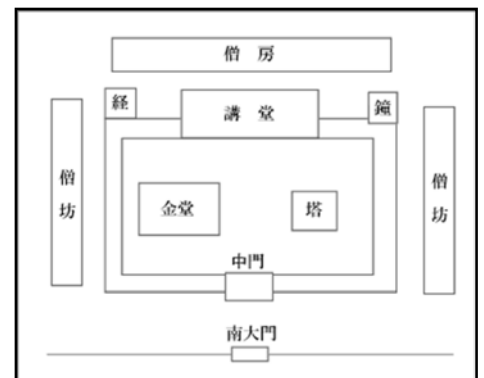
写真：左・古墳時代前期の竪穴住居跡出土壺 右・江戸時代の墓



西別府廃寺(にしべっぷはいじ)

平成28年7月から3か月にわたって西別府地内で事務所増築にかかる発掘調査を実施しました。この遺跡は深谷市に隣接し、幡羅郡家の関連遺跡としての寺院と考えられております。出土した遺物は、古代寺院の瓦が多量に確認され、これらの瓦の時期は、奈良時代から平安時代初頭ごろ(8世紀~9世紀)と考えられます。そのうち、軒平瓦(のきひらがわら)はその軒先部分に「均正唐草文」が施されており、本格的な寺院であったことを窺い知ることができます。

また、調査では、伽藍配置から考え、参道途中の「中門」と推測することができる巨大な柱穴が確認されました。これにより、過去の発掘成果と合わせて伽藍の建物の位置関係をより詳細に検討することができ、貴重な成果を得ることができました。(腰塚)



写真：軒平瓦 右図：西別府廃寺 推定伽藍配置(法起寺式)

連載 くまがやの古墳群

⑬ 上之古墳群—実態が分かりつつある古墳群—

上之古墳群は、上之地区の自然堤防上に所在する古墳時代後期に造られた古墳群です。現在、古墳群は狭い範囲の分布と捉えられています。以前は古墳の墳丘と推定される墳頂部に八幡宮が祀られている古墳1基(第1号墳)の存在が確認されていただけでしたが、発掘調査により徐々に発見例が増えています。

平成13・17年度、平成20年度、平成25年度の区画整理事業に伴う発掘調査では、新たに3基確認されています。これらを、順に第2号墳、第3号墳、第4号墳と呼称し、第2号墳は、周溝まで含めた推定直径約24.5mの円墳で、周溝から円筒埴輪が出土し、時期は6世紀初頭と考えられます。第3号墳は、同じく推定直径約19mの円墳で、周溝から円筒埴輪のほか土師器坏が完形で出土し、時期は6世紀初頭と考えられます。第4号墳は、周溝の一部が確認されておりその幅8.5mと大きいことから、比較的大型の円墳と推定されます。(吉野)

写真：上之古墳群第3号墳(東から、右下：周溝出土土師器坏)



文化財センター通信

◇観光・文化財アプリ「くまここ」リニューアル

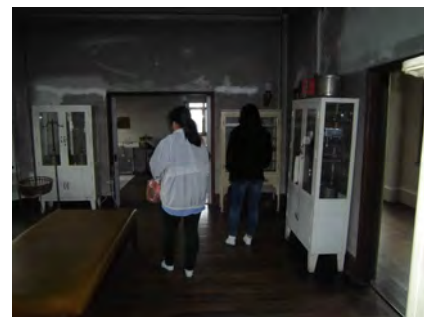
スマートフォン、タブレット端末用アプリ「熊谷観光・文化財ナビ」をバージョンアップし、次の内容をリニューアルしましたのでお知らせします。1. 名称を「くまここ」に変更。2. アプリトップ画面・アイコンのデザインを変更。3. 歩数計、熊谷デジタルミュージアムへのリンクボタン、写真フレーム機能追加。

写真フレームは、アプリを起動後「記念写真」を選択すると写真フレームの入ったカメラが起動し、記念写真が撮影できます。SNS等にアップしてご活用ください。Android 端末は「Google Play」、iPhone 端末は「App Store」から「くまここ」で検索してダウンロードしてください。(森田)



◇坂田医院旧診療所の一般公開

今年も県民の日（11月14日）に、坂田医院旧診療所が一般公開されました。坂田医院は昭和6年に建てられ、昭和50年代前半まで使用されていました。建設当初の状態を残している、昭和初期の地方近代建築の貴重な遺構として、平成16年に国有形登録文化財になりました。今年は、天候もよく、昨年より多くの方が見学に来られ、遠くは愛知県や岐阜県、東京都や神奈川県からも見学者がいました。なかには古い建物が好きで、前から見学したかったのだが、なかなか来られず、今回休みを取って、見学に来たという方がいました。この旧診療所は大きな建物ではないのですが、とても熱心で、1時間以上見学していた方もいらっしゃいました。(金子)



一般公開した内部の様子

◇浄安寺千体地蔵公開「お地蔵様の日」

平成25年（2013）9月に発生した竜巻及び台風被害により浄安寺（御正新田）の地蔵堂が倒壊しました。この内部には市指定文化財（有形文化財・彫刻）の「浄安寺千体地蔵」が収蔵されており、熊谷市教育委員会では、地蔵堂の解体と併せて、本尊の地蔵及び千体地蔵の救出を目的とする「文化財レスキュー」を実施しました。その後、千体地蔵及び本尊の保存修理を実施し、今後、本堂にて安置されることになりました。平成28年10月23日、「お地蔵様の日」として一般公開及び報告会を開催しました。会場には約100名が来場し、地域の文化遺産と保護活動について知る機会となりました。(山下)



千体地蔵と本尊

文化財探訪 小江川・聖観寺跡（おえがわ・せいかんじあと）

緩やかな丘陵と、谷合の斜面に並ぶ家々の風景が良く残る小江川の地には、かつて「聖観寺」と称する寺院がありました。この寺院の開基は不明ですが、江戸時代の文化・文政期（1804～1829）に編まれた武蔵国の地誌『新編武蔵風土記稿』には、「聖観寺 天台宗今市村高蔵寺末小久保山大悲院ト號ス 本尊観音ヲ安ス」と記されています。

明治期の廃仏毀釈により廃寺となったこの寺院は、現在、その存在を示すものとして、天和・元禄期（1681～1704）にかけて造立された僧侶の墓塔の無縫塔や庚申塔・日待供養塔が数基、東向きの平場に残されています。無縫塔には、「元禄十七甲申年 権大僧都法印永海 和尚位 正月十二日」と刻まれています。地元の小江川自治会では、往時を偲び、「小江川千本桜」事業の一環としてこの地を整備し、桜を植樹しています。(森田)



丘陵斜面の平場に残る石仏群

文化財コラム 古代との遭遇・第19話『宮下遺跡』続編

現在、発掘調査中の宮下遺跡は熊谷市千代に所在し、江南台地上に立地しています。今回は、宮下遺跡で出土した縄文時代の痕跡についてお話しします。時代を計るものさしは土器です。土器の形・文様・つくりや出土状態から、いつの時代のものか判断していきます。宮下遺跡が所在する江南台地は古くから人の営みの痕跡がみられ、縄文時代では、原谷遺跡出土の草創期の縄文土器が一番古い資料になります。宮下遺跡では約8,000年前の縄文時代早期、貝殻で文様をつけた条痕文系土器（野島式）がみつかっています。

また、その頃の遺構として炉穴（ファイヤーピット）が複数見つかりました。炉穴とは早期の特徴的な遺構で、穴の底やまわりが焼けているもので、野外での調理施設と考えられています。埋まっていた土（覆土）は、黒褐色のコブシ大の堅い土塊で白い粒がたくさん詰まっていた。地質学の先生によると、浅間山系安山岩の粒ではないかとのことで、時代がわかる貴重な資料になるかもしれません。このほか、前期の諸磯式、中期の勝坂式、加曽利E式、後期の称名寺式、堀之内式、紐線文系土器などの縄文土器が出土していることから、宮下遺跡では断続的に長く人々が暮らしていたことが分かってきました。江南台地の先端で、河川や森林の恵みを得やすい場所であったため、集落がつくられたと考えられます。（蔵持）

右写真：炉穴（ファイヤーピット）と呼ばれる屋外の炉（調理施設）が3基程確認されている。



報告 「愛染堂保存修理事業」の竣工

平成28年9月18日に愛染堂保存修理事業の竣工を祝して落成式（落慶式）と愛染堂・市指定有形民俗文化財「愛染明王」の一般公開を開催しました。平成27年に「愛染堂保存修理委員会」が設立された後、同年9月から保存修理工事が開始されました。工事では、屋根の瓦を軽量鋼板へ葺き替える改修、崩壊した部分の復元、内部の木材補修及び付帯工事（追加となった高欄・軒下廻りの補修、台座修繕、畳張り替え工事など）が実施され、平成28年8月に修理工事は完工となりました。約2,400万円の費用を要しましたが、市補助金及び所有者等負担のほか、1,500万円にもの寄付や募金によって事業が運営されたこととなります。所有者と檀家、地域住民、染色業者、商工関係者、大学、研究機関、賛同者など多くの方々の協働によって本事業が進められたことは、全国に向けての「熊谷スタイル」の発信となりました。（山下）



編集後記 文化財保護とイノベーション

本報告は、熊谷市内の文化財保護事業を発信する窓の役割を担っています。今日において情報を得るための手段としてインターネットやスマートフォンが急速に普及しています。それとともに活版印刷が発明された以降の歴史を受け継ぐように紙媒体での情報は今後も色褪せないということもできます。文化財の保護においても最新の研究を用いた分析や保存修理の方法が模索されています。文化財の情報発信においても様々なツールのイノベーション（技術革新）が進み、古き文化と新たな技術の融合が果たされています。文化財が過去と現在と未来をつなげる窓であるために、私たちの仕事が一翼を担えるよう取り組んでいけたらと考えています。（山下）



発行：平成29年1月1日

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係）

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話 048-536-5062 FAX 048-536-4575

メール c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

文化財の紹介、ブログ「熊谷市文化財日記」、「BUNKAZAI情報」バックナンバーなどを豊富に掲載